

# 本を選ぶ

NO.474 2024年(令和6年)11月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

<https://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL:03-6908-4643

- <ろん・ぼわん>呪文を唱えれば 続
- 大学教員ノート 第12回
- 図書館員の地域活動その後



●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 呪文を唱えれば 続

庭のシラカシに見慣れぬ中型の鳥がやってきた。キジバトのようだ。やがて近所の桜の木から枝を啜っては頻りに往復するようになった。営巣しようとしているなら大変。お引き取りいただきなくてはならぬ。レモンの木にしつこく来襲するアゲハ同様追い払うしかない。長い棒を引っ張り出してきて、キジバトの番い<sup>つが</sup>に諦めさせる作戦だった。

しかし、読み逃していた本を拾い上げて熱中してしまった。『教養としての「ラテン語の授業」——古代ローマに学ぶリベラルアーツの源流』(ハン・ドニール 著/本村凌二監 訳/岡崎暢子 訳/ダイヤモンド社/2022)。著者は東アジアで初めてロタ・ロマーナ(バチカン裁判所)の弁護士になったハン・ドニール氏。ラテン語という古い言葉を通して、歴史、哲学、宗教、文化、芸術、経済のルーツを解き明かす。韓国では100刷を超えるロングセラーだということから驚く。視点がユニークで確かに面白い。

そんな日の夕方、韓国女性作家、韓江(ハン・ガン)さんのノーベル文学賞受賞ニュースが飛び込んできた。韓国としては2000年に金大中(キム・デジュン)の平和賞受賞以来。近作は『ギリシャ語の時間』(ハン・ガン 著/斎藤真理子 訳/晶文社/2017)。

ハン・ガンさんの長編小説は手強そうだ。「ある日突然言葉を話せなくなった女は、失われた言葉を取り戻すために古典ギリシャ語を習い始める。ギリシャ語講師の男は次第に視力を失っていく。ふたりの出会いと対話を通じて、人間が失った本質とは何かを問いかけていく」(版元のHPから)。

日本ではギリシャ語どころカラテン語すらあまり縁がないようではあるが、『テルマエ・ロマエ』の登場で多少は身近になった。

と思いきやラテン語は合唱界隈では当たり前のように歌われているのを忘れていた。ローマの詩人オウィディウスの詩にチェコの作曲家ペトル・エベン(Petr Eben, 1929-2007年)が曲をつけた『永遠の美容法』(オウィディウス/木村健治 訳『恋の技術/恋の病の治療/女の化粧法』西洋古典叢書 L035/京都大学学術出版会/2021)は合唱コンクールで自由曲としてしばしば登場する。カエサルが暗殺された頃の、つまり2000年前の詩人の女性の美容法の歌を日本の中学生や高校生が合唱コンクールで原語のラテン語で歌い上げている。

曲目は「Medicamina sempiterna(永遠の美容法)」

1. De facie formosa(美しい顔について)
2. De arte faciem colorandi(化粧の仕方について)
3. De crinibus(髪のお手入れについて)
4. De pulchritudine sempiterna(永遠の美しさについて)

我が家のシラカシへの営巣妨害は長い棒のおかげで成功し、キジバトは去って行った。(埜村 太郎)

# 大学教員ノート 第12回

## —豊かさとは何か—

石川 敬史

少々よろしいでしょうか……。  
お願いがありまして……。

ここ数年、自治体からの協議会や委員会へお声がけいただく回数が増えた。弱小女子大学に勤務し、「移動図書館」という狭い領域を静かに研究し、学会では存在感が皆無の身にとって、本当に有難い限りである。文字通り、「身に余る光栄」である。

私でよろしければ……。  
微力ではございますが……。

年数回の協議会や委員会とはいえ、手振り身振り生の声で図書館現場の現状や課題、思いや悩み、葛藤が語られ、学校関係者、利用者、ボランティアさんなどからは、実に豊かな経験と知見を背景としながら図書館に対する指摘や評価が語られる。高所からの演説ではなく、まさにリアリティある「ことば」が交わされる。

あれっ、もう会議は終わり？

A市の図書館協議会に初めて出席したときの心の中の「ことば」である。協議会が始まって、まだ1時間しか経っていなかった。あれよあれよと審議事項、報告事項と進んでしまい、気がつくと、すでに最後の「その他」の議題に到達していた。汗を流しながら小さく挙手をして、先の議題である審議事項、報告事項に対する数々の質問を——まさに会議の時計を戻してしまった。事前に郵送された資料から質問を考えていたが、いざ会議の場となると、あれこれと考えすぎてしまった（と思う）。

じっくり議論して協議会で提言も出しましょう。

数年後、委員長を拝命することになった。動く図書館協議会としていくため、提言の取りまとめ、

グループワークなども展開してしまった。会議の場でしっかりと発言すること、図書館協議会とは何かを問い続けていくこと——A図書館の図書館協議会で学んだことである。

あれっ、今回も私だけがオンライン？

B図書館のサービス計画策定の委員会に出席したときの心の中の「ことば」である。日程調整の際に、対面でもOKの日にちを毎回提出しているが、なぜか私だけ毎回オンラインでの出席であった。おそらく会議室では私の顔が大画面で上映されていたのではないかと——オンラインの場合、どうしても発言のタイミングがつかめず——困惑の表情が上映され続けていたと推測する。お恥ずかしい限りである。委員会が終了すると、会議室内ではフランクにさまざまな意見交換がなされている——孤独な私はモニターでにぎやかな会議室を横目に「退出」ボタンを毎回クリックしていた。

毎回オンラインとなりましてゴメンナサイ。

委員の任期を終えた頃、学会の研究大会にて、委員長・C先生にご挨拶することができた。図書館現場の生の声を聞くこと、多くの委員へ語りかけること、質問すること、現場を視ること——B図書館の委員会で学んだことである。

指定管理者制度の導入は慎重にすべきでは？

D図書館の指定管理者選定委員会の資料をめくっていたときの心の中の「ことば」である。委員会ではまず募集要項や仕様書などの資料が検討される——図書館の具体的な実務、日々の活動など、もっともっと「小文字」で記すべきではないかと——果たしてこの内容と記述量は適切なのかどうか、司書という専門性とはいったい何か、を問い続け

ていた。委員会では、D市の幹部職員が多数を占め、外部からは私を含め3名という構成であったが、委員の末席を汚す私に、なぜか何度も仕様書等の相談があり、自問自答の日々であった。たくさんの団体からの提案があり、12月25日のクリスマスに1日かけて各団体からのプレゼンテーション・質疑に出席した記憶は鮮明である。

長期的な視点で、いずれ直営に戻すことも視野に。

眼前の指定管理者の導入そのものが目的化され、中長期的な視野で図書館のあり方をD市が問うことがない「空気」の中、思ったことを愚直に発言してしまった。議事録にしっかりと刻んでいただき、今後D市が検討すべき材料をつくること、御用学者にはならないこと——D図書館の指定管理者選定委員会で学んだことである。

ひょっとして指定管理者へ丸投げになっている？

E図書館の指定管理者選定委員会の事前打ち合わせをしていたときの心の中の「ことば」である。委員長を拝命し、E市担当者と仕様書等の打ち合わせを重ねていた。が、図書館には明るくない担当者であった。薄いホチキス留めの資料をめくりながら、図書館の現実を正しく表現できているのか、E市の姿勢が気になっていた。E市幹部職員が半数、市民も含め外部から半数という委員構成であるため、第1回目の委員会時からまさに「小文字」で議論が展開された。毎回、委員全員の発言を促していたため、応募団体からのプレゼンテーション時、質疑応答の時間は50分近くを確保したのではと記憶している。振り返りや総括の時間も1時間近く取っていただいたと思う。

指定管理者制度の導入を一度総括してみてもは。

E市では何回か同様の委員会にお声がけをいただき、委員会の度に発言を重ねてきた。自治体担当者も図書館を考え、市民も図書館を考え、そして学びあいを続けていく契機をつくる——E図書

館の指定管理者選定委員会で学んだことである。

いや〜、報告と評価が単調で長いのでは？

F市の図書館協議会に委員として出席していたときの心の中の「ことば」である。図書館から前年度の事業報告を受けて、協議会が協議・評価をする流れであるが、項目ごとに、報告→協議・評価、報告→協議・評価、報告→協議・評価と、静かに静かに回転していくため、単調で長く、迂闊にも睡魔に襲われてしまう。図書館活動の十分な実績があり、図書館員の想いが込められた報告ではあるが、前年度という過去の評価になるため、議論がなかなか活発にならなかった記憶がある。

社会教育のための機関が図書館ですね。

F市においても委員長を拝命することとなった。A市同様に、動く図書館協議会としていくため、提言の取りまとめ、グループワークなども展開してしまった。誰のための図書館であるのか、そして図書館協議会とは何かを問い続けていくこと——F図書館の図書館協議会で学んだことである。

\* \* \*

いったい会議は何のために開催されるのか——「豊かな共存が自分の生を支え」、「すべてのひとに基本的人権が保障され」(p. 240)、同時に「ありかたの豊かさ」(p. 242)とは何か——協議会や委員会に出席するたびに、ふと『[豊かさとは何か](#)』(暉峻淑子/岩波書店/1989)の視座を思う。『[豊かさの条件](#)』(暉峻淑子/岩波書店/2003)のひとつに「安心の中から人間の自由な創意が発揮」(p. 240)される、「助け合う相互と互惠の社会」(p. 239)であると指摘している。それは充実した豊かな会議の進行という単純なものではなく、図書館は何のために地域社会に存在するのか——図書館に関わる自治体職員、図書館員、学校関係者、ボランティア、指定管理者社員・スタッフ、取引先企業社員・スタッフ、利用者・市民、そして会議の委員も含め——「地域で豊かに生きることを保障する土台」としての図書館への視座と原理の合意に通じる。

(いしかわ たかし：十文字学園女子大学)

## 図書館員の地域活動その後

後藤 婉子

昨年の今頃この欄で、私の勤務先の図書館の所在している地区の認知症アクションチームの活動について書かせていただいた。前年に発足した組織で、認知症当事者の方が認知症であっても地域で変わりなく暮らせるようにサポートしていくことを、様々な年代・職種の人が各種の活動を通して行っている。

今年行った活動の中で主なものを紹介するとまず昨年に引き続き「落語を楽しむ会」。

昨年は、地域連携の活動を行っている地元の東京農業大学の落語研究会の部員の方々に来ていただき（全員女子）初々しい落語を聴かせていただいたのだが、今年は図書館の入っている区民センターで定期的に土曜寄席を開催されているグループの方々と、昨年もお出でいただいた認知症落語なるものを創作でやっておられる都立松沢病院の新里和弘医師で、本格的な感じで演じていただいた。今年も大勢の方に聴いていただけ、元々認知症のため落語を聴きに行くことが難しいので地域で楽しめたらというご要望のあった当事者の方も楽しんでくださっていた。

次に「RUN伴」への参加。こちらはNPO法人認知症フレンドシップクラブが主催する全国規模の認知症啓発イベントで、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを目指して、認知症の人々やご家族、地域住民、医療・福祉関係者の方々と一緒にタスキをつなぎ、日本全国を縦断する」（世田谷区のRUN伴チラシより）ものである。

世田谷区でも区内4コースで開催され、私の参加している認知症アクションチームは経堂コース（小田急線経堂駅から隣駅の千歳船橋間の9か所のポイント）でタスキを繋いだ。

当日は土曜日で、私は勤務のため直接参加はできなかったのだが、ゴールがお昼の12時で、場所が図書館の上階にある児童館の広場だったのでゴールイベントに参加することができた。

文京区から来てくださったダンス部隊のマツケンサンバや音楽療法のグループの楽器演奏、フラ

ダンスなど参加者がゴールすると大盛り上がりで児童館に来ていた子ども達も物めずらし気集まってきて、老若男女問わず地域の人が楽しんでいる感じでとてもよかった。

このようなイベントの他にも、地元のスポーツクラブにご協力をいただいているテニス教室、認知症への理解を深めるため出前で開催するアクション講座などの定期的な活動を行っており昨年「交渉中」という事で紹介したのだが、機械化等で商店での買い物がしづらくなったという認知症当事者の方の声を受け、「認知症あんしんサポート店」への登録を呼びかけるというかたちで地域の商店に協力依頼をすすめている。

一見すると図書館とは何の関係もないことを熱心にやっているようなのだが、地域での活動に参加して各方面に顔出しすることで図書館の職員ということで認知していただけて、レファレンスの要望が出てきた時にすぐ対応できるかと思うし（実際資料検索を何回かお受けしている）認知症関係の本の紹介や講演会の開催（来年予定している）などでは力を発揮できるのでは思っている。そのあたりは本が何にでも繋がっている強みであろう。

話変わって、図書館の話題。

先日世田谷区立図書館主催で「文字活字文化の日記念講演会」が開催された。文字活字文化の日は、2005年に施行された文字・活字文化振興法により、読書週間の初日に当たる10月27日に定められている。世田谷区立図書館では毎年この時期に講演会を行っており、今回で14回目となる。

今回はハリセンボンの箕輪はるか氏をお招きして「読書にまつわるエトセトラ」という題目で講演していただいた。箕輪はるか氏は、司書有資格で、光文社の週刊誌「女性自身」で書評連載もしているということで、担当者は以前から講演会にお呼びしたいと思っていたようだ。箕輪氏自身も講演会をやってみたいという気持ちがあったようで、この度事務所が変わったのを機に講演をして

いただけることになり、初の講演会に世田谷区を選んでいただき、区立図書館の職員としては嬉しい限りであった。

演題にあったようにご自身の読書体験について語っていただいたのだが、おすすめの本がひとつひとつありあって独特感が強く面白かった。

\*\*\*\*\*

■図書館総合展にLASスタッフが参加した様子を少しだけお届けします。初日11月5日、「地域の未来を拓く移動図書館の可能性」フォーラムに本誌連載「大学教員ノート」でお馴染みの石川先生がご登壇されました。会場は満員御礼の札がかけられ大盛況。名古屋市鶴舞中央図書館と福島県双葉郡富岡町図書館から事例報告もありました。名古屋市の自動車図書館は課題解決のため小型化へ。機動力を高め地域イベントにも引っ張りだこ。様々な分野とのコラボが生まれているようです。そして印象的だった富岡町の移動図書館。東日本大震災で大きな被害を受けた富岡町の復興の歩みが語られると会場の空気は一気に静まりました。図書館のあり方を真剣に検討されてきた図書館スタッフの生の声に、自分の住む町とは大きく状況が異なるその様子を想像しながら、みなさんじっと聞き入っていました。「本を借りても、いつ返せるか分からないから」「避難住宅で今日も一日誰とも会話をせず終わった」富岡町図書館はそんな声を受け止め、

芸人さんらしいところを感じさせつつも、普通の女性感が強く、とても好感の持てる方だった。

初の講演会は成功だったと思うので、翌日参加されるという秋田でのトークイベントへの自信を深められたのではと思う。

(ごとう わかこ)

「離れているあなたに、私達が会いに行きます」と。

満開の桜が描かれた移動図書館は、本を運んでいるだけでなく、決意と、希望と、本の周りに人が集まる空間を運んでいます。是非みなさんも富岡町公式YouTubeチャンネル「富岡町の移動図書館」でその様子を見てください。



写真は、TRC が販売する軽自動車移動図書館 LiBoon の実機

『直木賞作家・今村翔吾氏』と図書館を語る！～目指せ【図書館本大賞】創設～』フォーラムにも参加。図書館本大賞実現に向けて相当な熱意を感じましたが色々なお声がありそう。司書のみなさんのご意見が気になります。学校図書館司書、木下通子さんのブースにも遊びに行きました。ツーショットはLASのHP、[スタッフブログ](#)で。(LAS 探検隊)

## DMがたろく

# ESTRELA

■2024年11月号  
No.368/11月10日発行  
B5判 64ページ  
定価1,205円(税込)

【特集】コンパクトシティの歩みと展望

■コンパクトシティ政策の経緯と今後の展開：スマートシティとの融合に向けて/  
秋元 菜摘(静岡大学情報学領域 准教授)

■地方都市においてコンパクトシティは実現可能なのか？  
一字都宮市を事例に—/  
西山 弘泰(駒澤大学文学部地理学科 准教授)

■メルボルンにおけるコンパクトシティ概要と現状/  
堤 純(筑波大学生命環境系教授)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル 5階  
TEL : 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>

Y字路はなぜ生まれるのか?

重永瞬 2090円

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11  
Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>

瀬戸一夫

## ムーミンの哲学 [新装版]

『ムーミン』の8つのエピソードが織りなす西洋哲学の旅。 3080円



松田康博・福田 円・河上康博 編

## 「台湾有事」は抑止できるか

日本がとるべき戦略とは 研究者と自衛隊元幹部が検証。 3300円



**勁草書房** TEL 03-3814-6861 \*価格税込  
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

## 傷はそこにある

12月中旬刊

〈越境〉と〈横断〉のソーシャルワーク(仮題)

大嶋栄子 [著] (NPO法人リカバリー代表)

逆境を生き延び、アディクションを抱える女性たちが安全でいられる場所をつくる——領域の垣根を越えケアを問いなおす実践の軌跡



●予価2640円(税込) ISBN 978-4-535-98540-7

## 「原爆裁判」を現代に生かす

12月下旬刊

核兵器も戦争もない世界を創るために

大久保賢一 [著] ●予価1870円(税込) ISBN 978-4-535-52840-6

1955年、広島、長崎の被爆者5名が提訴した「原爆裁判」を原資料の基づき丁寧に解説。



**日本評論社** 〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
☎03-3987-8621 <https://www.nippsy.co.jp>



宮脇 真彦・楠元 六男・片山 由美子・小澤 寛・秋尾 敏 編

俳句とは何か、俳句の魅力とは何か。古典から近現代へと連なる俳句の歴史、実作・教育まで、俳句の全体像を体系立てて示した事典。

B5版 752頁  
定価22,000円(本体20,000円)  
ISBN978-4-254-51067-6

**朝倉書店** 東京都新宿区新小川町6-29  
〒162-8707 TEL03-3260-7631

## 人事管理の研究・プラクティス・ギャップ

日本における関心の分化と架橋

江夏幾多郎・田中秀樹・余合 淳 著



日本の人事管理に研究者と実務家はどのような関心を抱いてきたか。その推移や相違を振り返り、両者の関心がしばしばずれることを踏まえて、望みうる建設的な関係性を議論する。実学が避け難い問題に正面から向き合った、気鋭の研究グループによる展望の書。

A5判 定価3,630円

**有斐閣** 東京都千代田区神田神保町2-17 価格税込  
<https://www.yuhikaku.co.jp/>

## お金のデザインと歴史

お金の歴史や技術って面白い!!



昨今キャッシュレスが浸透し、お金は目に見えにくいものとなりがちです。しかし、お金にはさまざまな歴史や技術がつまっています。改めてお金自身の意味や歴史について調べてみましょう。

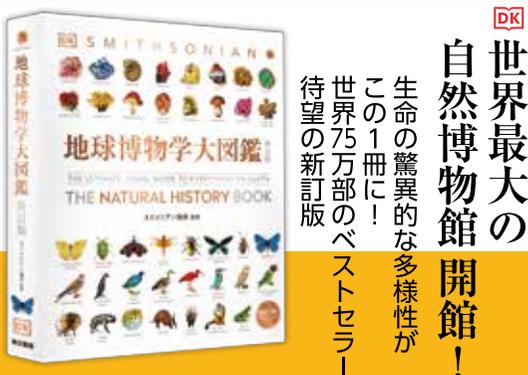
貨幣博物館カレンシア・監修

- 定価: 本体3,600円+税
- A4変型判(29x22cm)/64頁
- ISBN978-4-265-08670-2

●小学校・中学年～中学生



この1冊が未来をつくる **岩崎書店** 〒112-0014 東京都文京区関口2-3-3 7階  
TEL:03-6626-5081 FAX:03-6626-5085



世界最大の自然博物館開館！  
生命の驚異的な多様性がこの1冊に！  
世界75万部のベストセラー！  
待望の新訂版



## 地球生物学大図鑑 新訂版

スミソニアン協会監修  
オールカラー672頁 定価11,000円(税込)

◀詳しい内容はこちらから 東京書籍